

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2726 号 2015.11.18 発行

溺れません！ 高齢者用の浴槽用座布団を開発

産経新聞 2015年11月18日



介護用品として初出展された浴槽座布団。福祉関係者が注目している＝長浜市

介護が必要な高齢者などの入浴中の事故が報告されるなか、事故の発生を防止しようと、滋賀県長浜市口分田町の福祉用品販売メーカー「ふれあいサポート」は浴槽用座布団を開発した。湯船の底に敷いて使うことで、湯船で滑って溺死するなどの危険防止や、背中や尻の痛みなどの軽減効果などが期待できるという。

商品名は「浴槽ざ布団&背クッション」。縦横40センチで、厚さ3・5センチ。肌に触れる表側は水切りが良

いポリエステル系素材、湯船に密着し固定させる裏側は塩化ビニールを使っている。

湯船にすぐ沈み、座ると体に密着するほか、メッシュ状の滑り止め素材の効果で、湯船の底に足を入れた際や座った際に滑りにくいという。価格は1枚6000円から8000円。先月に同市で開かれた「びわ湖環境ビジネスメッセ」で初めて出展された。

同社の伊藤肇代表取締役が2年前、介護者から聞いた浴槽事故をヒントに研究し、実用化にこぎつけた。早ければ12月に発売する。

聴覚障害の孤独感から救ってくれたのは高校教師だった 医師・関口麻理子さん

朝日新聞 2015年11月17日



■孤独、救われた教師のひと言

船橋二和病院リハビリテーション科長の関口麻理子さん（45）は、両耳がほとんど聞こえない医師だ。「聴覚障害をもつ医療従事者の会」代表を、来年から担う。

専門は回復期のリハビリテーション。診察では相手の話に集中し、表情をじっと見て唇の動きを追う。補聴器がないと、自分の声もほとんど聞こえないという。「リハビリは共同作業。本人や家族、医師が力を出し合う。もっと患者さんと話をして距離を縮めたい」とほほえむ。

中学入学後、友だちとの会話も授業もついていけなくなった。孤独にさいなまれていた時に出会った難聴の高校の先生に「聞こえなくても大変なことはない。チャイムが分からなくて生徒にからかわれることくらいかな」と言われ、心が晴れた。母に「耳が聞こえたら向いていそう」と言われたことが、医師を目指すきっかけになった。

聴診器の音や心電図の小さな音が全て聞き取れるわけではない。FMマイクや電話のオペレーターサービスも使う。パソコンで補えることも多くなってきた。

手話通訳の夫と5人の娘がいる。「常に助けてもらってきた。自分に何ができるか、考え続けたい」 (棚橋咲月)

増える「高齢者の貧困」

カンテレワンダー 2015年11月12日

ことしの流行語大賞の候補に『下流老人』というショッキングな言葉が入るほど、今、経済的に苦しい生活を強いられる高齢者が増えています。生活保護を受ける水準で暮らす高齢者は700万人以上いるといわれています。貧困に直面する高齢者たちの日常取材しました。

企業城下町として栄えてきた大阪・守口市。76歳の国光フサノさんは、5年前から年金だけで暮らしています。

食費は1日千円までと決めています。食材を選ぶ基準は、値段です。

【国光さん】「高いから...」

ニンジンも1円でも安いものを選びます。国光さんは11年前に夫を亡くし、今は一人暮らしです。

【国光さん】「安い物を買って...、もうそうしないとね。やっぱり今度お金使い込んだら借りに行くところないし。貯金ないです。もう主人が死んでから全然...、そやから今あるだけのお金で。年金のお金で」

この日も千円以内におさめました。これで3日間もたせます。

家賃3万円の賃貸住宅に暮らす国光さん。定年まで工場で働いた後、72歳まで清掃の仕事を続けました。働き詰めの人生でした。

年金の通知を見せてもらいました。

【国光さん】「これが今年なんです...」

2ヵ月で18万4千円余り。ひと月9万2千円です。去年より2000円も目減りしました。

生活保護を受けるより低い金額です。

【国光さん】「年金が少なくなってから、だんだんと少なく買い物しています。前は服でもぱっぱっと買っていましたけど。結局、もう食べるのが(精一杯で)ね...。そやからもう、病気したらこれいけないと思って。一番気を付けるのが病気なんです」

週3回、整形外科に通っています。



【看護師】「天気よくなって良かったな」

国光さんは、清掃仕事での無理がたたって膝を痛めました。電気治療を受けると、少し楽になります。

大病をした時、入院費に困り、役所に相談に行きました。

生活保護を勧められましたが、受けませんでした。

【国光さん】「生活保護はいいです。どうしても食べられないならかけていただきますけど、この入院費だけあったらいいですって...」

お昼ごはんはヨーグルト一個。

その100円も負担に感じています。

9万2千円の年金収入から、家賃や食費、光熱費を支払いました。

衣服は買わず、銭湯を3日に一度にするなど、切り詰めた生活をしましたが、国光さんの手に残ったお金は5000円程度でした。

【近所の森架一郎さん】「こんにちは、お元気ですか？」

【国光さん】「はい」

近所の友人が、一人暮らしの国光さんを心配して、時々、顔を見にきます。

【森さん】「ちょこちょこ来るんやけどね。まあ、なんやかんやしゃべってね。死んだら葬式したるわ言ってるんやけどね、こっちの方が先に死ぬかもしれん」

国光さんの笑顔を久しぶりに見ました。

【森さん】「帰るわ」

【国光さん】「ジュースでも飲みませんか？」

【森さん】「バナナ、いる？日本人やから2本や」

【国光さん】「ありがとう。気を付けて帰って下さい」

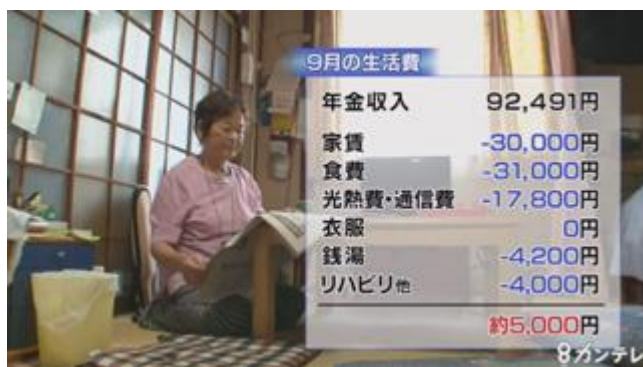
誰とも喋らない一日がある国光さんにとって、心がほぐれる時です。

少ない年金でギリギリの生活を送る高齢者が増えています。物価や医療費が上がっているのに、年金が減っているからです。

典型的な町のクリニック、北原医院。患者の3分の1が後期高齢者です。

医師の井上美佐さんは、父親の後を継ぎ、地域医療に力を注いでいます。

【井上医師】「ちょっと胸の音聞くで」



井上医師は、高齢者の生活の実情を肌で感じています。

【井上医師】「はい、了解、良好良好」

【井上医師】「年金生活苦しいのに、生活保護取らないで頑張っているお年寄り、本当にたくさんおられるんですよね。本当に皆さん、言われぬ、困っているってことを表に出さない」



支払いを気にして診察にこない患者もいます。

長く顔を見せない患者のことが気になります。

【井上医師】「電話をお持ちじゃないんですよ。14日やから薬そろそろ切れていると思うけど、来なかった？」

【看護師】「来られてません」

【井上医師】「どうしているんやろね。支払が（年金の入る）明日までできひんからかな？明日来るかもしれんね。しゃあないね」

高齢者にとって、貧困の引きがねになるのが病気です。このクリニックに通う飯田真治さんもその一人です。

【飯田さん】「全部で（月に）2万円くらい。家内いれて（年金は）18万円ないからね、だからしんどいですね」



肺気腫と腎臓病を患って、10年以上になります。

【井上医師】「息苦しいのは大丈夫ですか？」

【飯田さん】「夜は酸素外して寝られるようになりました」

【井上医師】「オシッコのほうはどうですか？」

【飯田さん】「オシッコの方は7～8回、膀胱に管入れて...前向きで、なにくそと思って」



タクシーの運転手として実直に働き、家族にもめぐまれた飯田さん。

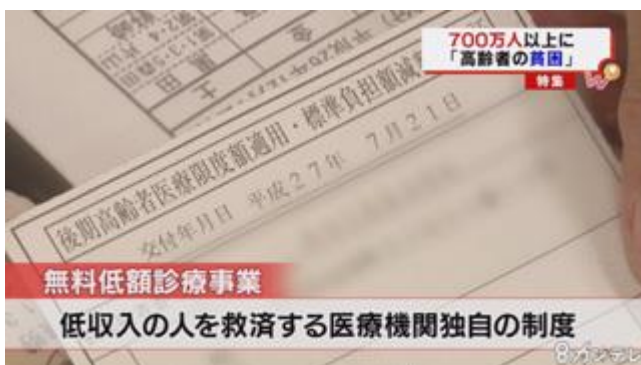
定年を前に病気がちになり、思い描いていた老後が崩れていきました。

【医院の窓口】「7780円ね。酸素の方のお金、頂きます」

年を追うごとにかさむ医療費が、飯田さんの生活を圧迫しています。

定年後に自転車屋を開きたいという夢も諦めました。

あわせて6つの医療機関で治療を



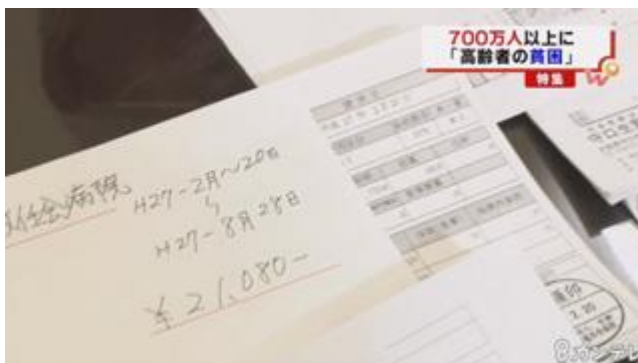
受けています。支払は月2万円。

妻の年金と合わせても生活保護を受けるのと同じ程度の月18万円で暮らす飯田さんは、食費を削って医療費の支払いにあててきました。

飯田さんは、井上医師のアドバイスで、所得が低ければ1カ月の医療費が8000円までに減免される『無料低額診療事業』の救済を受けています。それでなんとかやりくりできています。

【飯田さん】「消費税というのが何に使われているかというたら、最初は、導入したいきさつは、やっぱり福祉という触れ込みで国民に協力を呼びかけた訳でしょ。まあ、病気なんか誰も好んでなりたくないおらへんねやけどね。だから僕ら、貧乏な国民は憤りを感じるわけですね」

今、日本には、経済的に困窮する高齢者が700万人以上いるといわれています。真面目に働き、穏やかな老後を過ごすはずだったお年寄りたちの生活が、崩れ始めています。



超未熟児で生まれ5歳になった君へ 作詞作曲してCDに 中日新聞 2015年11月16日



ママが贈る愛の歌

体重わずか617グラムで生まれた「いっくん」

体重617グラムの超未熟児で生まれた長男への思いを込め、東京都板橋区の主婦岡本元子さん(40)が作った歌がCDになった。「生きられるかどうか分からない」とさえ医師に言われた長男は5歳になり、岡本さんは幼稚園のママ友達と組んだバンドで子どもたちへの愛を込めて歌う。(細川暁子)

岡本さんの長男「いっくん」は2010年9月、体重わずか617グラムの超未熟児で生まれた。岡本さんは妊娠10週で切迫流産になり、17週で入院。妊娠6カ月後半の23週で感染症にかかり、帝王切開で出産した。保育器の中の弱々しいいっくんを見た時の心境を、岡本さんは自身が作詞作曲した歌「ママが泣ける日～Happy Birthday」でこうつづる。

声を上げて泣くこともできないきみ ガラス越しに誓った「必死に守らなくちゃ」 消えそうで

「生まれても、生きられるか分からない」と医師に言われていたいっくん。腸への血流が滞り、細菌に感染することでかかる病気「壊死(えし)性腸炎」などが原因で6回も手術を受けた。岡本さんは自分を責めた。上の2人の子どもの送迎で、妊娠初期に自転車に乗ったことが切迫流産につながったのでは、との思いが消えなかった。



「大丈夫」と言い聞かせ笑ってても 自分を許せずに「ごめんね」「ママのせい？」 くりかえした

幼稚園のママ友達と組んだバンドで「いっくん」への愛を込めて歌う母親の岡本元子さん(中央) = 9月、東京都内で

いっくんは約半年後に体重3キロを超え退院。2歳1カ月で歩けるようになり、昨年からは地元の幼稚園に通っている。入園当初は

できなかった階段の上り下りが今は自力でできるように。体重も13キロまで増えた。



岡本さんはいっくんが通う幼稚園のママ友達とバンド「音ごはん」を組み、歌を作り始めた。早稲田大のサークルで、学生時代にバンドのボーカルとして歌っていたときの情熱がよみがえってきた。バンド名には「音楽が心の糧になるように、親子で聞いてほしい」との思いを込めた。

今年9月、「音ごはん」は5歳になったいっくんの誕生日を祝い、東京都新宿区でライブを開催。集まった親子連れが、岡本さんの力強い歌声に聞き入った。

Happy Birthday きみを守ってきた強いママも 今日泣いたっていいよね 笑顔のきみが がんばったママへのごほうび

5歳になり元気に幼稚園に通っている

今月、「音ごはん」は「ママが泣ける日」を含むオリジナルの3曲入りCD（税込み1000円）を自主制作しネットなどで販売を始めた。岡本さんは「生きている奇跡に感謝して、親子で聞いてほしい。子育てを頑張ろうとの思いを込めた」と話している。

問い合わせは「音ごはんメール」=otogohan@jcom.zaq.ne.jp=へ。



障害者描く弁当包装好評／平川の事務所

陸奥新報 2015年11月18日

日替わり弁当を包む、障害者によるアートの包装紙。左はフランスのモンサンミッシェル、右はトマト

弁当とアートのコラボレーション。障害者の就労支援事業所、社会福祉法人ほほえみの「カリフラワー」（平川市）が製造する日替わり弁当の包装紙が好評だ。同施設で就労する障害者が描くさまざまな絵が印刷されており、弁当配達を利用している人の中には、「毎回捨てずに集めている」という人も。同施設では、障害者の個性や得意なものを伸ばし“強み”として発信する、新しい支援の一つとして取り組んでいる。

問題行動の対応不足、保護者らが通報へ...大阪市

◆大阪市、来年度に導入

大阪市教育委員会は17日、暴力行為などの問題行動に対して市立の小中学校が取る措置を児童・生徒に示し、学校が適切に対応しない場合は保護者らが市教委に通報できる仕組みを定めた。来年度から導入する方針。学校での厳格な対応を徹底するため、文部科学省によると、教委への通報を促すのは異例という。

市教委では2013年1月に市立桜宮高の体罰自殺問題が発覚後、生徒指導が適切に行われるよう、問題行動への対応指針を策定。悪質性に応じて5段階に分類し、「警察に相談」「出席停止」などの措置を定めている。

今回はこの指針を基に「学校安心ルール」を作り、児童・生徒らに配布。「ルールで約束された『措置』

読売新聞 2015年11月17日

「学校安心ルール」で定める問題行動と対応(一部を抜粋)

レベル	問題行動	学校が行う措置
1	<ul style="list-style-type: none"> 他の生徒が嫌がることを言う 教員の指導を無視する 	<ul style="list-style-type: none"> 個別指導や家庭への連絡 奉仕活動や学習課題を課す
2	<ul style="list-style-type: none"> 授業の邪魔をする 学校の物を壊す 	<ul style="list-style-type: none"> 複数の教員による個別指導 数日間の奉仕活動や学習課題
3	<ul style="list-style-type: none"> 教師や他の生徒を脅す 学校をサボり地域でたむろする 	<ul style="list-style-type: none"> 警察に相談 一定期間の別室での学習指導
4	<ul style="list-style-type: none"> 暴力を振るい、けがをさせる 他の生徒に物品をたかる 	<ul style="list-style-type: none"> 警察に通報 出席停止、学校外に於ける「個別指導教室」での指導
5	<ul style="list-style-type: none"> 極めて重い暴力、傷害、脅迫、強要、恐喝などの行為 	<ul style="list-style-type: none"> 警察、児童相談所、児童自立支援施設などで対応

※同じ行為をくり返すと、レベルを上げて対応

が実施されていないと思われるときは、お知らせ下さい」と明記し、被害を受けた子供や保護者が学校の対応が不十分と感じた場合、市教委に連絡するよう呼びかける。同日の教育委員会会議で、来年度の1学期に試験運用し、2学期から本格導入する方針を決めた。

文科省の調査では、14年度の大阪府内の小中高校における暴力行為の発生件数は児童・生徒1000人あたり10・6件。都道府県別では最多で、全国平均の4・0件を大きく上回り、対応が課題となっている。市教委は児童や生徒にルールを守らせる一方、学校側に一貫した対応を求めることで、安心して学校に通える環境づくりを進める。

文科省によると、問題行動への対応や考え方を例示している教委は他にもあるが、対応を怠った学校について保護者からの「通報」を促すのは「聞いたことがない」としている。

(どないしょ大阪) 子ども先生も笑う 学校作り支援を 聞き手・石原孝

朝日新聞 2015年11月17日



大阪大大学院の小野田正利教授

■大阪大大学院教授 小野田正利さん

大阪は学力が低いってよく言われますよね。その根拠として示されるのは、小6と中3を対象にした全国学力調査の結果。確かに2007年以降、毎年のように全国平均より成績は振るいませんでした。

ただ、学力調査の平均正答率だけで子どもたちの学力のすべてが測れるわけではありません。教育委員会が公表する調査結果は公立学校の分だけ。大阪は私学に行く子どもも多いので、彼らを含めれば結果は違うでしょう。大阪の子どもの学力が低いなどと、過度に心配する必要はないと

思います。

一方で、家庭環境に問題を抱えた生徒は、成績が低くなるという分析結果が出ています。大阪は他の都道府県と比べ、不登校や中退する生徒、校内での暴力行為の件数は極めて多く、深刻です。解決のためには、先生が進んでアイデアを出せるような環境作りが大事です。

シンボルキャラは「大根首に巻いた柴犬」！？に決定 大阪・守口市 愛称募集へ

産経新聞 2015年11月17日



愛称を募集する守口市のシンボルキャラクター

大阪府守口市が一般公募していたシンボルキャラクターのデザインが市民らの投票で決まった。ご当地野菜「守口大根」と柴犬(しばいぬ)を組み合わせた親しみやすいデザインで、市はキャラクターの愛称を募集する。

デザインは、府内在住の六倉実結(むつくらみゆい)さん(23)の作品。長い守口大根をマフラーのように首に巻き、肩に掛けたポーチの中には大好物の守口漬が入っているという設定で、散歩が日課という。

一般公募で266作品の応募があり、市の選考委員会が上位20点を選定。10月に市内在住、在職らを対象に投票を行い、六倉さんのデザインが選ばれた。

キャラクターの愛称は、12月1-25日に受け付ける。市の選考委員会と市民らの投票で最優秀作品を選び、平成28年4月に発表を予定している。問い合わせは市地域振興課(06・6992・1516)。

「ソーシャルワーク教育は失敗」 『下流老人』著者の藤田氏が持論

福祉新聞 2015年11月18日 福祉新聞編集部
登壇した藤田氏



日本社会福祉教育学校連盟（会長＝二木立・日本福祉大学長）は10月30日、創設60周年を記念し、同志社大（京都市）で歴代会長による対談を行った。同日夜、同大で開かれた祝賀会には日本社会福祉士会、日本精神保健福祉士会など職能団体の幹部も駆け付け、学校連盟を含むソーシャルワーカー養成3

団体の統合にエールを送った。

大学の教員ら約40人が参加した会長対談で、大橋謙策・東北福祉大大学院教授（2007～09年の会長）は「社会福祉士ができてから、（大学での教育は）福祉制度の解説にとどまっている。社会福祉士を作ったことが間違いだったかと思う」と話した。

そのうえで「我々教員は抽象的な話ではなく、ソーシャルワークの楽しさ、怖さ、醍醐味を学生に伝えていかななくてはならない」と呼び掛けた。

黒木保博・同志社大教授（05～07年の会長）は自身が事務局長に就いた08年以降、学校連盟が厚生省と文部省（いずれも当時）の共管による社団法人化を目指したものの、03年に文科省単独所管の社団法人になった経緯を振り返った。

学校連盟は日本社会福祉士養成校協会（社養協）、日本精神保健福祉士養成校協会（精養協）と17年4月に統合することが決定済み。黒木教授は「引き裂かれた団体がやっと一つになる。心の底から喜んでいる」と話した。

学校連盟は1955年5月に日本社会福祉学会から分離独立した日本社会事業学校連盟が前身。社会福祉学の教育の質的向上を図る学術研究団体で、正会員は147校（15年6月現在）。

左から二木、黒木、大橋、野村、大嶋の各氏
「SW教育は失敗した」



翌31日・11月1日は統合予定3団体主催の全国社会福祉教育セミナーが同大で開かれ、教員や学生ら約420人が参加。初日は生活困窮者を支援するNPO法人ほっとプラス（さいたま市）の代表理事で、『下流老人』（朝日新書）の著者、藤田孝典氏が基調報告、シンポジウム、分科会に登壇した。

社会福祉士の藤田氏は「私は社会福祉学部、大学院を修了したが、面白くなかった。制度の解説、面接技術などマイクロレベルの技術に傾倒していた。ソーシャルワーク教育は失敗したと言わざるを得ない」と話した。

また、学説などの論争が見られない福祉の業界体質にもメスを入れ「対等で緊張感のある激しい議論や批評がない業界に発展はない」と指摘。著名な学者にも遠慮せず論争を挑むべきだとした。

2日目は、9月17日に厚労省が発表した「新たな時代に対応した福祉の提供ビジョン」を読み解く緊急企画を開催。学校連盟の二木会長はこのビジョンが福祉人材の養成にメスを入れるものと受け止め、危機感をあらわにした。統合予定の養成3団体はこのビジョンへの対応を協議するため、特別委員会を設ける予定だ。

